

アートによる新生ふくしま交流事業

アートで広げ！ 子どもの未来プロジェクト 2024

主催：福島県

事業受託者：認定特定非営利活動法人 ドリームサポート福島

◆この事業は、国内外からお寄せいただいた寄附金をもとに造成された「福島県東日本大震災子ども支援基金」により実施しています。

記録集

アートによる新生ふくしま交流事業

アートで広げ！ 子どもの未来プロジェクト 2024

「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」では、子ども達の心豊かな成長を支援するため、アートのワークショップを開催し、創作活動の機会を提供しています。

ワークショップの企画にあたっては、知識の蓄積だけでなく、互いの価値観を共有することで、多様性を認める寛容な考え方や新しい価値を創造する力を育んでほしいという想いを込めました。

ワークショップ講師には、芸術家や表現者としての活動のみならず、大学などで教員養成の科目を担当するなど、子どもの発達段階と創作活動を専門とする方々を招聘しました。事前に目的や目標、実施方法について綿密な打ち合わせを行い、校種や学年、発達特性、地域性に応じた教科横断型のプログラムを実施しました。

CONTENTS

Program 1

P2

身体と色のインタラクティブなダイアログ
ー絵の具あそびを通じた探求

講師 小室明久（東京家政大学期限付助教）

Program 2

P6

ふくしま探検 ～ふしぎな生き物を調査せよ～

講師 廖曦彤（山形大学講師）

Program 3

P10

アート＆サイエンス「ふくしまの魚を描こう！」

講師 渡邊晃一（福島大学教授・美術家）

Program 4

P14

カラフル・コミュニケーション 2024
ーわたし／わたしたちの色、ふくしまの色ー

講師 手塚千尋（明治学院大学准教授、ワークショップデザイナー）

身体と色のインタラクティブなダイアログ ー絵の具あそびを通した探求

講師 小室 明久 (東京家政大学期限付助教)

Akihisa Komuro



指とからだを使って絵の具で遊ぶワークショップ。
からだと色とがどのように相互作用するかを探り、
制作過程で感じたことや発見を共有しました。

大きな白い画用紙の上で絵の具の感触、 変わっていく色、友達のぬくもりを満喫

小室明久先生のワークショップには、放課後児童クラブの1年生から6年生と、支援学校の1年生が参加しました。ワークショップを申し込む際、放課後児童クラブの職員の方は「コロナ禍で活動を自粛していたので、ワークショップを通して存分に楽しんでほしい」「夏休みの楽しみを増やしたい」などの思いがあったそうです。

3回実施したワークショップで小室先生は、ロール画用紙と「ゆびえのぐ」を用意しました。放課後児童クラブでは、幅90cm、長さ5mのロール画用紙を3枚敷いた空間に、白いTシャツに着替えた子どもたちを招き入れました。何が始まるのかみんな興味津々です。まず3人または2人1組になってジャンケン！勝った子どもがロール画用紙の上に寝そべりポーズを作ります。手に絵の具をつけた子どもたちが、その輪郭を

なぞって行きます。太く濃く描けたら交代です。ポーズを作っている子は動けません。途中で心配になり「ちゃんと描けてる？」と聞いたり、絵の具を付けた子の手が体に触れる度「くすぐった〜い」「やばい！」「手にも塗られた！」など、歓声を上げていました。

全員の型取りができたところで北塩原さくら児童クラブでは、様々な線を生かして地域のシンボル「桜峠」の桜を描き上げました。郡山市御館小児童クラブでは、最初の子どもの形に2番目の子どもはどんな形を足すと良いかを考えて寝そべり、どんどん形を足していきました。最後に小室先生が「まだ描いていないところがあるけど、どこかな？」と尋ねると、大きな声で「Tシャツ!!」と子どもたち。互いのTシャツを染め合いながら絵の具の感触、重なり混ざり合いながら変わっていく色、友達の温もりを満喫しました。



2024年8月7日(水)北塩原村 北塩原さくら児童クラブ
2024年8月8日(木)郡山市 郡山市御館小児童クラブ
2024年8月27日(火)田村市 福島県立たむら支援学校



多摩美術大学卒業、東京学芸大学大学院教育学研究科修了。東京都立小学校図画工作科専科教員、中部学院大学短期大学部講師を経て、現在、東京家政大学期限付助教。幼児の造形活動の実践と研究が専門。





作品は、どの子どもそれぞれの方法で楽しんだ軌跡 楽しい時間を分かち合った喜びを伝え続ける

たむら支援学校ではワークショップを申し込む際「いろいろな色を使って『楽しい』『おもしろい』を体験させたい」「外部の方の支援のもと活動の幅を広げたい」という願いをお持ちでした。

当日、小室先生は、長いロール画用紙と短いロール画用紙を1枚ずつ用意しました。長い画用紙の上に寝そべりたい子どもを募ると、うつぶせになった男の子の輪郭を、お手本として絵の具を付けた手でなぞりました。みんなで続いたかと思いきや…数分後には、どんどん弾けて画用紙、手や足、ほっぺ、Tシャツにも絵の具をぬりぬり。様子を見ていた子どもも笑顔弾ける友達と先生方の「上手だね」「いいね～」などの声かけに高

揚し、仲間に入ります。絵の具の海と化した画用紙の上で転がったり、ジャンプしたり。一方で賑やかな時間を受け入れながら、静かに指につけた絵の具で螺旋を描き続ける子どもの姿も。小室先生は、どの子どもそれぞれの方法で存分に楽しむことを優先させました。「その結果、子どもたちの体と色の跡が画用紙に残されました。その軌跡を作品として見ていくのが大事なんだろうと思います」。

改めて3つのワークショップから生まれた絵を見てみると、絵巻物のように長〜い作品のあちらこちらからみんなの歓声が聞こえてくるようです。



参加者の感想（子ども）

- ・みんなと協力して面白い形を作れたところがよかった。
- ・紙の上に寝転んでポーズを取って型取りをする時、友達が絵の具で私を描いてくれるのがくすぐったかった。
- ・色を塗ったり、思いのままみんなと思いきりできたのがよかった。
- ・みんなで考えて桜の木とかを手を使って、ぐりぐり描いたのが楽しかった。
- ・学校では、小さい画用紙にバレット。手や足で描くのもなかった。まさかみんなの力でこんな大きな絵になるとは思っていませんでした！
- ・大胆だなあって思いました。自分も大胆にできました。
- ・もっと大きく描きたい！



児童クラブ・支援学校職員の感想

- ・まさかロール画用紙の上に寝転んだ子どもの輪郭を型取りするとは思ってなかったので、度肝を振られました。みんなで描いた桜は、指や手のひら、足まで使っているいろいろな桜を表現することができました。ワークショップの前半で型取りした時のラインが山っぽく見えたりして、素敵だなと思いました。機会があったらまた申し込みたいです。
- ・みんなで絵の具を塗るのも楽しいし、絵を広げたのも楽しい。夏休みの日常の空間が一瞬で別世界になっていきました。夏休みの間は基本的に室内にいて、どこにも行きませんので、来てもらえてうれしかったです。
- ・子どもたちが、みんなで一つの活動に長い時間集中して取り組んだり、自分なりの遊び方を見つけて楽しんだりする姿は、普段の学習では見られない生き生きとしたものでした。
- ・地域の作品展や学園祭に子どもたちの作品を展示して、地域の方に子どもたちの活動を知っていただくということが、これから子どもたちが、この地域で生きていくというところでの地盤作りになっていくので、これからもこうしたワークショップを活用させていただけたらと思っています。



ふくしま探検 ～ふしぎな生き物を調査せよ～

講師 リャオ シトン
廖 曦彤 (山形大学講師)
Liao Xitong



一緒に近くの海岸や川岸、公園、野原を歩いて
流木や木の枝、小石などを探したり、触ったり、
色を塗ったり、装飾をしたり…。
そこから架空の生き物を見立てて、
ふしぎな生き物プロフィールを作りました。

材料を探しに外へ。見慣れた風景もテーマを 持って眺めるといつもと違って見えてきます

廖曦彤先生のワークショップは、小学生
から中学生まで、いわき市川部公民館で実
施したワークショップには、保護者も参加
しました。

当日、廖先生は河原や学校内にある林に
出かけることについて、こんなふうに話し
てくださいました。「石や流木、木の枝など、
いずれも単体で生きているわけではないで
すよね。多様な環境で、人との関わりの中で
生きています。『ふしぎな生き物』を考える
時、そうしたところまで想像できたらと思
っています」。また、「自然はたくさんの刺
激を持っていますが、遊ぶ時はそこに目が
行かない」とも。「自分が住んでいるところ
や通学路や校庭など、テーマを持って眺め
ると普段と違って見えてきます。石や枝を

探した環境まで感じて『もしかしたら、こん
な生き物が住んでいるかもしれない』など、
イメージを膨らませてほしい」とのことです。

実際、外に出るとスイッチが入った子ど
もたちの目は、それまでと異なりました。山
から運ばれてきた石と流れ着いて丸くなっ
た石が混在する河原では、拾うだけでなく、
地面から石を掘り出したり、大きな石を
割って持ち帰る強者も。学校の敷地内にあ
る林で、廖先生が用意しておいた流木と出
会った子どもたちは、「白い」「軽い」「スベ
スベ」など、その特徴を丁寧に観察しました。



中国出身の美術家。これまでに日本国内で
多くのワークショップを実施。山形大学で
は幼保ならびに小・中・高校の図工・美術
の教師を育成する科目を担当し、幅広い年
齢の発達特性を踏まえたアート活動に取り
組んでいる。





ワークショップの中で考える習慣を 自分のものにしていこう

いよいよ制作です。着色が始まると、とたんに室内がびっくりするほど静かになりました。何を作るか決めて色を塗る子、石に色を塗ってから何にするか考える子、流木をしげしげと眺めながらどこを顔にするか考える子など、みんな真剣です。

「石や流木に色を塗ると風貌が変わるので、作る側の思考も変化します。『そうか、こういうことなのか』など、学校などで学んだことを進化させ続けるのが私のワークショップです。スタートは用意しますがゴールは用意しません。考える先で待つ『ひらめき』。そこに宝物があります」。

集中すること約45分。完成品が現れ始めました。インスタントカメラでふしぎな生

き物の写真を撮り、その生態をシートに書き込んだら完成です。作品を写真にすると肉眼で見る時の印象やサイズ感が変わります。「その辺りも楽しんでほしい」と廖先生。

「しんしゅのへび」「赤色ドジョウ」「おばけモドキ」など、想像力豊かに命名します。生態も「動くケーキ」(材料：石)は、足が速くてせっかち。「ニワトリ」(材料：石)は、穀物や草、どんぐりを食べる。体育館を走り回っているところを発見されたなど、これまで学んできたことを総動員させて組み合わせたり、進化させたりしながら説明文を書き上げました。読むと、子どもたちが秘めている力の凄さが分かります。



参加者の感想 (子ども)

- ・材料を探しに行ったのが楽しかったです。
- ・石に色を塗るといのは、やったことがなかったのでよかったと思います。
- ・流木をながめながらこれはどうしようかなとか考えたり、何色にするか考えるのが楽しかったです。

児童クラブ・公民館職員の感想

- ・外に出て材料を見つけてきたことは、とてもよかったと思います。自然に刺激されて、いろんな発想が出てきたんじゃないかと思いました。
- ・河原には、川石だけじゃなく碎石などいろいろな石がありました。尖った石もうまく使っていました。石が小さいというのもあったと思うのですが、子どもたちが本当に細かいところまで考えていました。次年度もお世話になりたいです。
- ・一人ひとりの個性や良いところが作品を作るという過程を通して知ることができました。



アート＆サイエンス「ふくしまの魚を描こう！」

講師 渡邊 晃一（福島大学教授・美術家）
Kohichi Watanabe



福島の海や川をテーマに、生息する魚の骨格や色彩、動きなど、身近な「生きもの」と地域の文化を学びました。最後は空想も交えての魚釣りゲーム。STEAM（美術と科学）の視点から、総合的に楽しく探求しました。

※STEAM（スティーム）教育とは、科学（Science）、技術（Technology）、工学（Engineering）、アート（Art）、数学（Mathematics）の5つの単語の頭文字を組み合わせた教科横断的な教育手法

わからないことに気づく。わからないことをわかるようにしていくことが大事

「ふくしまの魚を描こう！」は、福島県内や近海に棲む魚についてアートとサイエンスで掘り下げた後、みんなで描いた魚の絵を使って魚釣りゲームも楽しもう！というワークショップです。小学生1年生から5年生までの児童と、南相馬市で実施した回では保護者も一緒に参加しました。

ワークショップの導入で渡邊先生は、子どもたちに紙を渡しなが、「まず、魚の絵を描いてみましょう」と声をかけました。しかし、なかなか難しく隣の子の絵を見たり、考えるのをやめて想像力に頼って描く子どもも。この意図を渡邊先生に尋ねると「最初

にアウトプットしてから話を聞いたり、図鑑を見たり、本物の魚を見たりすることで、子どもたちは『ああ、そうだったんだ』と、理解を深めることができます」と話してくださいました。「子どもたちがわからないことに気づくこと。わからないことをわかるようにしていくことが大事です」とも。

続いて渡邊先生は、黒潮と親潮がぶつかる豊かな漁場が広がる福島県沖で獲れる魚や海、川、湖に生息する魚の話をしました。クイズ形式で、魚の名前を質問すると「金目鯛」「鯉」「ブラックバス」「マグロ」など、子どもたちから魚の名前がたくさん出ました。



身体や大地など幅広いテーマで絵画制作や現代美術作品の制作を行い、国内外の展覧会等で活躍中。近年ではレオナルド・ダ・ヴィンチの研究でも注目され、テレビ番組の監修も行う。福島ビエンナーレ、風と土の芸術祭など県内の芸術祭を企画監修。





見て描いて覚える楽しさを満喫

最後に描いた魚で釣りゲーム。みんな本気！

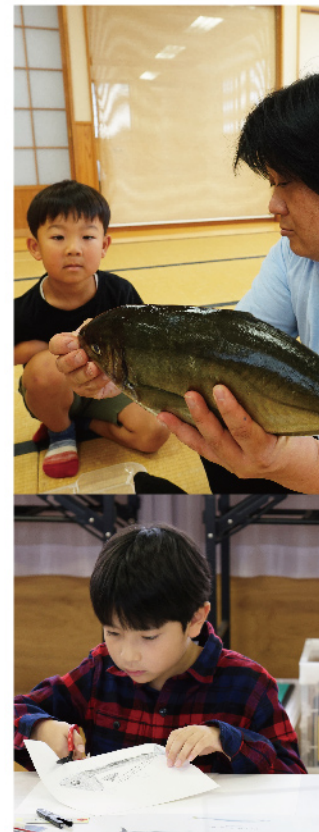
盛り上がってきたところで、なぜ魚は魚の形をしているのか、暮らす場所に合わせて体のつくりを変えてきた進化の話に移ります。生きた化石と言われるヤツメウナギの泳ぎ方。胸ビレ、腹ビレ、背ビレ、臀ビレなどを持つ魚の泳ぎ方とイルカやクジラの泳ぎ方の違い。陸に上がったワニの動きとヒトの赤ちゃんのハイハイの動き。ヒトの二足歩行と魚の違いなどをスライドや魚の骨格標本、鯉のぬいぐるみなどを見ながら学びました。その後、図鑑を見たり、水槽の中で生きている魚や解凍したアジを観察したり、触ったりしながら再び魚を描きました。

最後に渡邊先生はこんな話もしてくださいました。「見て描いて覚える楽しさ、面白さを忘れないでほしいです。漢字もそう

ですけど、私たちは見て書いて、また見て…を繰り返しながら覚えていきます。魚のワークショップがその楽しさに気づききっかけになればと願っています」。

よく聞いて何度も観察ながら描いた魚の絵は、骨格がしっかり感じられヒレもあり、今にも泳ぎ出しそう。想像上の魚と融合させて描く子どももいました。

最後は釣りゲームです。描いた魚を切り抜き、クリップをつけてブルーシートの海に放流したら、糸の先に磁石をつけた釣り竿で何匹釣れるか挑戦です！なかなか釣れなかった子どもは、途中で遠くに投げてゆっくり引き戻すなど工夫しながら、みんなで熱い時間を過ごしました。



参加者の感想（子ども）

- ・想像の魚「イカだんご」と、カラフルな「にじいろのさかな」を描きました。
- ・図鑑を見ながら「カクレマノミ」を描きました。
- ・紙を横に長く2枚つないで大きな魚を描きました。釣りゲームでみんなが「釣りたい」と言ってくれてうれしかったです。

児童クラブ・生涯学習センター・学校職員の感想

- ・普段できないようなものづくりを経験させたいと思って申し込みました。絵を描くこと自体は、クラブ内でも行っています。しかし、生きた魚を描くというのは、なかなかできることではないので、良い時間になったと思います。
- ・まさか最後に釣りゲームがあるとは！楽しい時間をありがとうございました。
- ・保護者も一緒に参加できる取り組みやそのような内容でした。夏休みの自由研究の題材になればと思って申し込みました。
- ・2日前に釣ってきた魚を子どもたちに見せられて良かった。



Program 4

カラフル・コミュニケーション 2024 —わたし / わたしたちの色、ふくしまの色—

講師 手塚 千尋 (明治学院大学准教授、ワークショップデザイナー)

Chihito Jetsuka



ワークショップによる協働的な学び、学習環境デザインを専門とする。色や形の表現による広義の異文化理解を目的としたワークショップを国内外で展開している。



わたしたちが暮らすまちでお気に入りのもの・場所・風景などを色で表し交流しました。わたしとあなたの「好き」が出会ったとき、どんなカラフルな世界が広がるでしょう。

色は人によって見え方が異なる。自分なりの見え方、感じ方を大切にたくさんの色に触れてほしい

「カラフル・コミュニケーション」は、199 色の色紙を使って、自分のお気に入りなどを色で表し、その意味を伝え合い共有するワークショップです。今回は、フリースクールの子どもたちと、川俣町に暮らすアートが好きな家族と放課後児童クラブの子どもたちが参加しました。

フリースクールでは、「わたしをカタル 色カルタワークショップ」を行いました。まず手塚先生の 6 つの質問に 199 色の色紙から色を選んで答えます。選んだ色を 2 枚 1 組の台紙の片方に貼って絵札にします。色の名前や意味を書いた方がカルタの読み札になります。質問は、「最近うれしかったこと」「わたしの日課(マイ・ルーティン)」「誰にも譲れないこと」「みんなに紹介したいとっておき」「自分らしさ」「あこがれ」の 6 つ

でした。

手塚先生は、「このワークショップの醍醐味は、色の名前や意味を考えること、感じることに、分かち合うところにある」と話します。カルタの発表タイムがまさに分かち合う時間となりました。テーブルの上に絵札を並べ、絵札を作った人がその理由や意味を説明し、みんなで共有しました。「母の料理の色」は、「最近うれしかったこと」の問いに答えて選んだ色に付けられた名前です。「まあ、いいやという曖昧さの色」は、「自分らしさ」の問いに答えて選んだ色に付けられた名前です。まとめに手塚先生は、「色は見る人によっても見え方が違います。自分なりの色の見え方、感じ方を大事にしながら、いろんな色に触れてほしいと思います」と話しました。





お互いの感性に触れ呼応し合って 磨かれる感性が自身の強みになっていく

絹で栄えた川俣町の羽山の森美術館で実施したワークショップは、「描かれた川俣の色から 色絵本をつくる」がテーマでした。最初に川俣町生まれの画家たちが、故郷を描いた作品の中から手塚先生が抽出した「川俣色」(13色)を並べて、「みんなに伝えたいとっておきの色」を選びました。次に199色と川俣色を足した計212色から僕・私を表す「わたしいろ」を選びました。

色を決めたら絵本作りです。白い冊子に選んだ色紙を貼り、名前とその物語を親子で考えて書き入れたら完成です。「親子間のあどけない話ですが、互いの感性に触れて、呼応し合い磨かれる感性が自分の強みに

なっていく。そんなふうに思います」と手塚先生。

集中すること約1時間半。どこにもない絵本ができたので、中身を少しだけ紹介します。「私の大好きな人」という名前の色には、「今日のママの服は、とっても似合っていました」というお話が書き留められました。「猫の肉球」という色には、「まちの中でよく猫ちゃんを見かけます。みんな可愛くて大好きです」というお話がつけられました。ほかにも「空の風」「学校から見える木の色」「家の庭にすんでいるキジ」「家で育てている1日20個食べるトマトの色」など、たくさんの色の名前と物語が書き留められました。



参加者の感想

●子ども

- ・たくさん色を見て、ちょっとしたことで感じる意味が変わることに気づきました。
- ・いろいろな視点で見られて良かったです。
- ・黒や茶色をポジティブな方向に見ることができ分かって良かったです。
- ・色を選ぶときに、自分と向き合うことができました。
- ・楽しかったです。お話を書くのが少し難しかったです。
- ・妹の色絵本に書いてあったことが面白かったです。
- ・みんなが作った色絵本の中に、妹の色絵本も

●大人

- ・家ではできないことなので参加して良かったです。
- ・面白かったです。色だけであんな立派な本ができるなんて。娘の感性そのものが本になったような感じです。色を言葉にするのが難しいけれど素敵だなと思いました。娘が選んだ色と色の名前を見て、その情景が思い浮かびました。そうか、こういうことを考えているんだなあと。大人ではなかなか思いつかないですね。頭が硬いから。そういうところ見るんだなあとと思いました。
- ・今までにない素敵なアートのイベントだなと思って参加しました。娘も二つ返事で「やってみたい」と。実際、楽しかったです。

フリースクール・ 美術館職員の感想

- ・室内にたくさんの色が並んでいるだけで、晴れ晴れした気持ちになりました。
- ・短い時間でしたが、子どもたちが自分の色を選んで絵本にして、鑑賞タイムで見ってもらうことで、互いの好きなものを認め合うということが、短時間に凝縮できていました。
- ・作品を文化祭に展示します。美術館の魅力も高まるかなと思います。
- ・地方ですと一流のアートに触れる機会ってなかなか少ないので、本当に良いプログラムでした。子どもたちの可能性、選択肢も広がると思います。持続的に実施していただければと思います。ぜひ毎年応募させていただこうと思っています。



アートによる新生ふくしま交流事業
「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」

みんなのアート作品展

県内外で活躍する4名の講師とともに創り上げた参加者の作品を展示しました。

2024年12月18日(水)～12月22日(日) 会場：郡山ビッグアイ 市民ふれあいプラザ(郡山市)

2025年1月18日(土)～1月26日(日) 会場：パセナカミッセ 地域交流スペース(福島市)



会場のアンケートから

- すてきな作品ばかりで、また参加させたいです。
- エネルギーを感じました。

- 子どもたちの心の中を少しだけのぞかせてもらった感じ。感謝。

- どんなことでも表現できることは、素晴らしいと思います。
- 子供さん達の自由で楽しい作品でした。

- とても良い、もっと多くの参加を期待します。
- 子供達の表現力を養うにはとても良い。

- 面白く楽しく拝見しました。
- 釣りが楽しかった。いろいろな魚がいておもしろかった。

- 巨大壁画と冊子にエネルギーを感じました。
- 素晴らしかった。ありがとうございました。

- 子ども達のパワーを感じました。
- 子ども達が楽しんで魚釣りをしていた。

- おもしろく、楽しく拝見しました。
- 手づくり感が良いと思います。

- 自分には分からない子どもならではの感覚があってとても楽しかった。

- 楽しんで参加している顔がステキ。
- 目頭が熱くなりました。素晴らしかったです。

- 流木アートがおもしろかった。
- VTRの楽しんでいる子ども達の姿が良かったです。

- インタラクティブなダイアログに子ども達のパワーを感じました。

／＼ ZOOMによるオンライン開催

アートで広げる子どもの未来プロジェクト

振り返りと可能性

関係者共有活動報告会

2025年1月26日(日)15:00～16:00

2024年度に福島県が実施した「アートによる新生ふくしま交流事業」の取り組み「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」を振り返りました。講師の皆さんにご参加いただき、アートを通して子どもたちの心豊かな成長をどのように支援して行くことができるかを考えると同時に、事業の可能性、ワークショップに込めた思いなどを伺いました。



実践を広く共有できる仕組みが必要

2年続けて教科横断型のワークショップを実施しました。お陰様で今回もきっちり出来たように思います。お申し込みくださった方々からは「次回も」というお話をかなりいただいています。この先の展開を考えた時に、思いを強くするのが、『価値観の共有』です。中でも一番大事にしたいのが子ども同士の共有です。ワークショップの感想を、例えば短い動画に残すなどして、それを見たたくさんの子もたちが「こういう考え方もあるんだな」というように認め合い、育て合えるような仕組みを作りたいと思います。

(事務局 菅野真)

自然と美術は繋がっている

今年度は、「ふくしまの魚」をキーワードに、福島県沖に生育している魚について考えました。魚を自由に描くところから始めたのですが、美術って理系の要素もすごくあるので、実際の魚の呼吸の仕方や泳ぎ方など、解剖学的な話や福島沖の環境の話などしながら、子どもたちには図鑑を使ってどんどん魚の絵を描いてもらいました。最後に魚の絵をみんなで共有して魚釣りゲームもしました。自然を通して美術を捉えるってとても大事なことです。子ども時代に親しむことで、アートって私たちにとってすごく大事なもののなんだと気づききっかけになります。福島県は美術専門の先生が少なく、鑑賞教育が中心みたいな授業が多くなってしまっています。そうした中で「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」は、福島にとって大きな意味を持っているように思います。

(渡邊晃一さん)

子どもはみんな詩人

色を通して自分自身と向き合うこと、自分と地域のつながりを考えることをテーマに、今回も199色の色紙を使ってワークショップを実施しました。日常生活や思い出からイメージを広げて選んだ色に名前をつけたり、お話を考えたりしたのですが、一つ一つの言葉はシンプルで素朴なのに、それらが集まった時にハッとするような「子どもはみんな詩人」みたいな気持ちにさせられました。一緒に参加された親御さんの感想で、「子どもがこんなことを考えているなんて知りませんでした」とおっしゃる方が結構いらしたことも印象に残っています。願わくは、その子らしさが出る場所って作品が出来上がっていく過程にあるので、そこが可視化できるような、例えばドキュメンテーションのような工夫をして、第三者に伝えられるような形を考えられたらと思います。

(手塚千尋さん)

ワークショップの軌跡が作品

児童クラブと支援学校に行かせていただきました。プログラムを考える際、子どもたちが絵の具で楽しむ過程と、ワークショップの軌跡をどのようにすれば残せるかということに心を砕きました。展示会では、みんなで描いた作品と一緒に友達と塗り合ったTシャツも展示できて良かったと思います。「桜が有名な地域なので一緒に描いてほしい」とか、「子どもたちの特性を踏まえた活動にしてほしい」など、事前打ち合わせでお聞きしたニーズにも深くコミットできたと思います。実践で感じたのは作品だけでなく、活動の背景であったり、時間の流れをたくさんの人にも見てほしいということでした。ワークショップをどう伝えるか。工夫していく余地があると思いました。(小室明久さん)

地域を歩いて作品に反映

今年は、流木だけでなく近くの河原で石を拾ってくるなど、自分たちが暮らしている地域を歩いて、そこにどういう生き物が暮らしているのか、歩いた時に感じたことを反映させて架空の生き物を考えました。石と流木ってフォルムも質感も違うので、昨年とはまた違う生き物が生まれました。来年度、また機会があれば、プロッターなど、材料の収集法を工夫して考えていきたいと思っています。出来上がった作品の見せ方としては、一つは時間軸。もう一つはエピソードをベースに伝えていくのがいいのではと思います。なるべくいろいろな角度から…例えば子どもの視点、講師の視点、スタッフの視点という形で多方向から多視点で補えば、立体的になると思います。

(廖 職形さん)

引き続きよい表現活動を届ける

今回、「まさにこういう体験を子どもたちにさせてあげたかったんです」という声をお申し込みくださった先生方からいただいております。

アートと人をどのように繋げていくか、工夫し、実践しているアーティスト(講師)の方々ばかりなので、子どもたちや地域の方にとても良い表現活動を届けていたのだと思っています。

本プロジェクトを伝える方法については、ショート動画なども含めて、先生方と事務局とが捉えている要素を有機的にコーディネートしながら、一つの動きを作っていくことを考えていきたいと思っています。(事務局 笠原広一)

アートによる新生ふくしま交流事業「アートで広げる子どもの未来プロジェクト」2024

発行 2025年3月

制作・編集 認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

デザイン 有限会社デザインングマープル

主催 福島県

事業受託者 認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

【お問い合わせ】

認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

福島県福島市三河北町2-8 Coko Mezon1階B室

TEL 024-563-1955 FAX 024-563-1955 E-mail info@f-jdi.com